

〈児童文学〉の半世紀 ②

古田足日さん、語る

——菅忠道から石田衣良まで



〈撮影：伊藤英治 98年〉

1927年11月29日、愛媛県現川之江市に生まれる。東京都東久留米市在住。子どもの読み物作家・評論家。『全集古田足日子どもの本』全13巻別巻1（童心社）ほか。

今からちょうど五〇年前の、一九五九年九月、古田足日さんの『現代児童文学論』（くろしお出版）が出版された。今や日本の児童文学を学ぶ者には必読の一本となった「さよなら未明」が加筆収録されたこの評論集から半世紀。現代児童文学を評論と創作の両面から切り開いてきた古田さんは、今の児童文学にどのような課題を見ているのか。児童文学評論研究会（注1）という会での発言に加除訂正を加えていただいたのが以下の稿である。（編）

現代日本児童文学出版のころと現在はどう違うのか

一九五〇年代後半から六〇年代前半にかけて、つまり現代日本児童文学出版の頃、よく「児童文学現在の課題」という原稿の注文がありました。今回話すように言われたとき、ではこの二〇〇八、九年という現在の課題は何か、課題にしたいのはどんなことか考えたいと思った。それと重ね合わせて、出版期ぼくはどのような課題を考えていたのか、それはどのような道筋を通り、どのように表現したのかしなかったのか、それも考えてみたいと思いました。

五〇年代前半のある年、その年出版された新刊創作児童文学の数を数えてみると自費出版を含めて一四、五点でした。（不正確ですが）敗戦直後、良心的、民主主義的といわれる児童雑誌がわっと出る。敗戦の翌年の末には「百誌以上」（菅忠道『日本の児童文学』大月書店 初版56年）になっ